



1 木造阿弥陀如来立像 1軀 【作品7-1】 蓮宝寺 紅葉丘2-41-3
像高 78.6cm ヒノキ材か 寄木造 漆箔 彫眼
平安時代後期 本堂本尊



左手を下げ右手を上げて来迎印を結んで立つ蓮宝寺本尊の阿弥陀如来像である。目を半ばとじた柔和な顔となで肩でおとなしい姿は、平安時代後期の和様彫刻全盛期の仏像ならではの上品さをたたえる。浅い衣文を刻んだ薄手の衣にもその時代の好尚がよく示される。均斉のよくとれた破綻のない造形には作者の優れた感覚と技術がうかがわれ、おそらく当時の中央の仏師による12世紀前半頃の作と見られる。

おそらくヒノキ材を用いて、頭体の幹部は前後に2材を矧ぎ、割首わりくびして、像内は大きく内刳りされていると思われ、平安時代後期によく見られる寄木造の技法で造られる。両手首以下と両足先、表面全体の漆箔と、光背、台座は昭和43年（1968）頃におこなわれた修理時のものである。

当寺は昭和28年に創建され、この本尊像は昭和43年に縁のあった大田区田園調布の照善寺から移安された。照善寺は寛永16年（1639）の創建と伝えられる。本像のそれ以前の来歴は不明だが、おそらく当初は京都など畿内の古寺に伝わったものであろう。府中市内に残された数少ない平安時代の仏像である。